

ポープの「横町」—スペンサーの模倣について—

海老澤 豊

18世紀前半の英国では『イーリアス』や『アイネイス』といった古典叙事詩をもじった疑似英雄詩が多数書かれたが、英国における叙事詩ともいべきスペンサーの『妖精の女王』(1590-6)やミルトンの『失樂園』(1667-74)を模倣した作品も少なくない。これらの模倣作の大半は、大詩人の用いたスペンサー連(5a5b5a5b5b5c5b5c6c)やブランク・ヴァースといった詩形、古雅な語彙、崇高な表現、種々の寓意(アレゴリー)などを借りながらも、些末な主題を歌うというバーレスクである。本論では17世紀後半から18世紀初頭におけるスペンサーの受容について概略した後に、¹⁾ スペンサー連で書かれた滑稽詩、ポープの「横町」(1728)を論じる。

「横町」はポープが10代の頃に書いた習作に属し、まともに論じられたことはほとんどない。およそ100年前にロマン主義的な傾向を持つ批評家たちが「横町」に触れているが、否定的な見解を取る者が多い。フェルプスは『英国ロマン主義運動の始まり』(1893)で「横町」は「古の詩人のかなり粗雑なバーレスク」で「作詩法の練習」にすぎないと断言し、ビアは『十八世紀における英国ロマン主義の歴史』(1899)で「あまり巧妙とは言えないバーレスク」と切り捨て、コリーも『スペンサーの批評家たち』(1911)で「取るに足らない作品として追いやられるのも当然」と言っている。ただしデ・マーは『近代英国のロマン主義の歴史』(1924)で「この短い機知の戯れは重要で、スペンサーの明らかなバーレスクとして最初の詩」と位置づけている。²⁾

だが騎士や姫君や種々の寓意が登場する『妖精の女王』の流麗な詩形に乗せて、イーストエンドのみすばらしく猥雑な風景を描くこの詩は、スペンサーのバーレスクとして後の詩人たちに影響を与えた。同じスペンサー連を用いた滑稽詩『女教師』(1737)

を書いたシェンストンは、「最初に『妖精の女王』を買ったとき、私は1・2ページを読んだが、読み進める気にならなかった。その後ポープの「横町」を知ってスペンサーを滑稽に考えるようになった。その観点からは誰でもスペンサーを楽しく読めようと思う」と書簡に書き記している。³⁾

1. スペンサーの受容について

『妖精の女王』はグロリアーナ(エリザベス1世)に仕え、「神聖」や「節制」など固有の美德を備えた12人の騎士たちが各々の冒険を企てる構成を取るはずであったが、実際には6巻と「無常篇」の断片にとどまった。スペンサーは「ローリーへの手紙」で『妖精の女王』の全般的な意図を説明している。この作品は「一連の寓意、謎めいた隠喩」に思われるかもしれないが、アーサー王の物語に仮託して「紳士や身分ある者に有徳で立派な訓育を授けること」が目的である。自分が手本にしたのはホメロス、ウェルギリウス、アリオスト、タッソーといった昔の叙事詩人である。立派な訓育は「寓意という意匠」であいまいに包み込むよりも、教訓として平易に述べるか、こと細かに説教したほうがよいと異議を唱える者もいるだろう。だが「万事が外見で説明され、一般人の感覚に楽しく快いものでなければ何も評価されない」という今日の慣習で満足すべきだ。⁴⁾

この『妖精の女王』の序文とも解される文章は、残念ながら後の批評家に揚げ足を取られることになる。17世紀の後半から18世紀の初頭にかけて、英国の文人たちがスペンサーの『妖精の女王』をいかに読んできたかを簡潔に探ってみたい。まずウィリアム・ダヴェナントは『ゴンディバート』(1651)

の序文で、ホメロスに始まる英雄詩の詩人の系譜の最後にスペンサーを置きながらも、『妖精の女王』における「廃れた語彙」や詩形の「不幸な選択」を非難し、彼の寓意的な物語は一貫性を欠いた「持続する途方もない夢」だと断じた。⁵⁾ またトマス・ライマーは『アリストテレスの詩学に関するラパンの論考の翻訳』(1674)の序文で、スペンサーを「英国の英雄詩で第一の詩人」と呼びながらも、ホメロスとウェルギリウスを手本とするのではなく、アリオストに誤って導かれたために「統一性の欠片もない」と非難し、「彼の詩は完全に空想の国なのだ」と嘆じている。⁶⁾

ウィリアム・テンブルは「詩歌について」(1690)で、スペンサーの「手際はすばらしく、空想の飛翔は気高く高遠」だが、「構想はひどく、倫理はあからさますぎて効果を失っている」と咎める。⁷⁾ ドライデンも「ユェナリウスの諷刺詩への献辞」(1693)において、スペンサーの「構想には統一性がまったくなく、英雄たちに特別な美德を賦与しているが、描き分けができていないために「みな同じ」になってしまうと腐す。⁸⁾

リチャード・ブラックモアは叙事詩『アーサー王子』(1695)の序文で、スペンサーはウェルギリウスが示した叙事詩の手本に倣わず、アリオストとともに「空想に急ぎ立てられて丘や谷を越え、奔放、不自然、突飛な「寓意の森の中で迷ってしまう」と批判する。⁹⁾ さらにジョン・デニスは『詩歌の批評の基礎』(1704)で、叙事詩で扱う「宗教は一つであるべし」「詩のなかの行動は一貫すべし」という規則を掲げた後に、スペンサーが「これらの規則に従わない」ために、古代人には到底及ばないと断言する。¹⁰⁾

彼らの批判はダヴェナント以降でおよそ共通しており、『妖精の女王』には全体の統一感がなく、スペンサーは古めかしい語彙を多用し、空想や寓意に頼りすぎているというのである。「ローリーへの手紙」でスペンサーが弁解していることを逆手にとり、作品の弱点としてあげつらっているのだ。ただしホメロスやウェルギリウスという叙事詩人の立派な手本を無視して、アリオストに倣いすぎているという

批判には、ギリシアやローマの古典をことさらに尊重する当時の文学思潮を感じざるを得ない。

一方でエドワード・ビッシュは現代詩人を称揚せんがために故意にスペンサーを貶めた。彼の『英詩の技術』(1702)は、前半で作詩法に関する細々とした規則を説き、後半で「最も自然で崇高な思考」を盛り込んだ最良の詩人たちからの引用を「不在」「イーゴン」「エトナ山」などの項目別に掲載した一種のマニュアルである。ビッシュは序文でチョーサーやスペンサーといった「古代詩人」は、「描写の妥当性、思考の適切さと偉大さ」において現代詩人に及ばず、彼らの言葉は古めかしく廃れたものなので現代の読者は聞く耳を持たないと断言する。同じ理由でビッシュはシェイクスピアを引用することにも積極的ではない。本文でもビッシュは英国の詩歌がチョーサーやスペンサーなどの「古代詩人」の時代から「とても磨き上げられ、洗練された」上に、現代詩人は彼らが無視した規則に則って実践していると主張する。¹¹⁾

これに対してチャールズ・ギルドンは『詩歌の完全なる技術』(1718)の序文で、ビッシュに真向から反対して、「本当に偉大な我らが詩人たちの作品に見られるすばらしいイメージを示す」ために、ビッシュが拒否したスペンサーやシェイクスピアからの引用を全面的に取り入れたと述べ、「この二人の偉大な詩人の魅力はとても強烈なので、詩歌における真の才能を持つあらゆる者の魂に触れずにはおかない」と激賞する。¹²⁾ ビッシュとギルドンの立場の違いは古今論争を思わせるが、両名とも作詩においてアリストテレス風の規則を重視していることに変わりはない。

スペンサーの受容を考える時に興味深いのが、ジョウゼフ・アディソンの変貌である。彼は「英国の大詩人について」(1694)で、スペンサーについてこう歌う。¹³⁾

Old Spencer next, warm'd with Poetick Rage,
In Antick Tales amus'd a barb'rous Age;
An Age that yet uncultivate and rude,
Where-e'er the Poet's Fancy led, pursu'd

Thro' pathless Fields, and unfrequented Floods,
 To Dens of Dragons, and enchanted Woods.
 But now the Mystick Tale, that pleas'd of Yore,
 Can Charm an understanding Age no more;
 The long-spun Allegories fulsome grow,
 While the dull Moral lies too plain below.
 We view well-pleas'd at distance all the Sights
 Of Arms and Palfreys, Battels, Fields and Fights,
 And Damsels in Distress, and Courteous Knights.
 But when we look too near, the Shades decay,
 And all the pleasing Lan-skip fades away.

(ll. 17-31)

次は古きスペンサー、詩的な靈感に燃えて、古代の物語で野蛮な時代を楽しませたのだ。いまだ教養もなく、未開なままの時代に、詩人は空想に導かれるままに追い求めたのだ、道なき荒野や、人が足を踏み入れぬ大河、ドラゴンの巣窟や、魔法のかけられた森を。だが往時を楽しませた神秘的な物語も今や分別を持った時代をもう魅惑できないのだ。延々と紡がれる寓意も鼻につくようになり、下には退屈な倫理があからさまに記される。我々は大いに喜んで遠くから眺めるのだ、武具や、馬や、戦闘や、戦場や、戦いを、苦難に陥った姫君、礼儀正しい騎士たちを。だが近づいて見ると、亡霊たちは朽ち果て、心地よい風景もすっかり消え去ってしまう。

「分別を持った時代」に生きるアディソンは、『妖精の女王』にスペンサーの空想が横溢していることは認めながらも、主題や物語の古めかしさ、あからさまな寓意や倫理に抵抗を感じると告白する。アディソンは引用に先立つ詩行でチャーサーについて歌っているが、そこにも「時は詩人の書いたものを錆びつかせ、彼の言葉を使い減らし、彼の才気を曇らせた。彼は洗練されぬ調べで空しく冗談を飛ばし、読者を笑わせようと試みて失敗に終わった」(ll. 13-6)とある。この詩を書いたのはアディソンが22歳の頃であるから、若気の至りということだろ

うが、当時の世評を鵜呑みにしてこのような詩行が生まれたのであろう。事実ポープの証言によれば、アディソン自身は「この詩をひどい出来だというのが常であった。というのも彼がこの詩を書いたのはとても若い時分なので、我が国の最良の詩人たちの特徴を伝聞によって記したのだ。だから彼の描くチャーサーは真実とまったく正反対である。チャーサーにはヒューマーが欠けていると非難しているのだから。彼の描くスペンサーの特徴も誤りである。私が聞いたところでは、彼はこの詩を書いた15年後(1709年：論者注)までスペンサーを読んだことがなかった」という。¹⁴⁾

後にアディソンは『タトラー』第254号(1710)で『妖精の女王』第1巻の主人公「赤十字の騎士」に触れて「すべてが魔法のかかった土地、妖精の国なのだ」と記している。¹⁵⁾ さらに『スペクテイター』第62号(1711)で、ミルトンと並んでスペンサーが観念の類似と言葉の類似を両方兼ね備えた「混在する機知」を用いる才能を持っていたと称え、第183号(1711)では『妖精の女王』について「あの賞賛すべき作品の最初から最後まで一連の寓意が持続している」と述べる。第297号(1712)では『失楽園』の「罪」と「死」に触れた後で「このような寓意にはホメロスやウェルギリウスよりも、むしろスペンサーとアリオストの魂の趣がある」と語る。「妖精の描き方」で有名な第419号(1712)ではオウィディウス、ウェルギリウス、ミルトンの寓意に触れて、「我々はこうした影のような人物の創造をスペンサーに見出すことができ、彼はこの種の描写にかけては賞賛すべき才能を備えていた」と褒めている。¹⁶⁾

このようにアディソンのスペンサーに対する態度には大きな変化が見られる。『ガーディアン』第152号(1713)には「ここでは、美德や悪徳や人間の感情が生きた俳優のように登場する寓意についてだけ言及しよう。この種の作品は古代人の中でも最も優れた作家たちによって実践され、我々が同国人スペンサーは寓意に傾注して成功を収めた最後の注目すべき詩人である」とスペンサーに対する最終評価とも言うべき文章がある。¹⁷⁾

スペンサーを模倣した実作にも触れておこう。マシュー・プライアの「謹んで女王に献じるオード」(1706)には「スペンサーの文体を模倣して書かれた」という副題がついているが、1連は10行からなり、脚韻も5a5b5a5b5c5d5c5d5e6eと本来の詩形とは少々異なる。¹⁸⁾ プライアは序文でスペンサーの「廢語」の使用は最小限に留めながらも、「表現方法と韻律の流れ」を模倣すると述べている。彼が手本としたスペンサーとホラティウスは「崇高を描く際に想像力の高みと表現の荘嚴さ」を備えており、いずれも描写力に長けているために「荘嚴であると同時に美しく」、「物語に倫理を混ぜ合わせる快い手法を」取っていると称賛する。この詩はアン女王とマルバラ公に捧げる称賛詩である。確かに『妖精の女王』でもエリザベス1世に対する称賛や阿諛が見られるが、内容の面では似ても似つかない。またサミュエル・クロクソールは、自分の曾祖父がスペンサーの学友であったと称し、『妖精の女王』の新たに発見された巻という名目で2編の詩を書いた。¹⁹⁾ これらはブリトマートやアーキマゴといった『妖精の女王』の登場人物に仮託して歌った、トリーーに対する諷刺詩である。

18世紀前半の英国におけるスペンサー復活で最も重要な役割を果たしたのは、ジョン・ヒューズであろう。彼は『スペクテイター』の常連寄稿者で、1715年に6巻本の『エドマンド・スペンサー氏作品集』を出版した。第1巻には「スペンサー氏の生涯」「寓意的な詩歌に関するエッセイ」「妖精の女王に関する論考」「羊飼いの唇に関する論考」の4編が収められており、スペンサーを擁護する姿勢が全面的に表われている。特に「寓意的な詩歌に関するエッセイ」において、ヒューズは『妖精の女王』には「これらの幻のような存在(寓意)が満ちあふれており、それは驚くほど強靱な想像力によって生み出され描かれている」と述べ、その例証として第2巻第7編でマモンがガイアンを地下の洞穴へ導き、宝物を見せる場面を引く。これは『アイネーイス』第6巻の冥界巡りの場面をスペンサーが模したものである。²⁰⁾

On thother side in one consort there sate,
Cruell Reuenge, and rancorous Despight,
Disloyail Treason, and hart-burning Hate,
But gnawing Gealosity out of their sight
Sitting alone, his bitter lips did bight,
And trembling Feare still to and fro did fly,
And found no place, wher safe he shroud him might,
Lamenting Sorrow did in darknes lye.
And shame his vgly face did hide from liuing eye.

(II. vii. 22)

反対側に一団になって座していたのは、残酷な「復讐」と深い恨みを抱いた「悪意」、不実な「反逆」と心を焼き尽くす「憎悪」で、心を侵食する「嫉妬」は彼らの視界から離れて、一人座り、苦々しく唇を噛んでいた。震える「不安」は常にあちこちに飛び回り、身を隠す安全な場所は見つけれずにいた。嘆いている「悲哀」は闇の中に横たわり、「恥辱」は醜い顔を人の目から隠していた。

ヒューズはこの描写における「嫉妬」の姿勢と「不安」の動きを激賞し、これらの寓意的な人物はほんの一瞬のうちに読者に示されると説く。²¹⁾ この場面は後にジョウゼフ・ウォートンもスペンサーの寓意の美点として触れることになる。またヒューズがスペンサーの寓意的な描写を、ルーベンスの寓意画に喩えているのも興味深い。

ヒューズは「妖精の女王に関する論考」で、『妖精の女王』に統一性がないという批判について、スペンサーはホメロスやウェルギリウスの叙事詩から引き出された規則に従って書いたわけではないと反論して、「スペンサーを古代の模範と比べることは、ローマ建築とゴシック建築の並列を描くようなものだ。前者により自然な荘嚴さと簡素さがあることは間違いなく、後者に我々は美と野蛮さの見事な結合を見出す、劣った装飾の多様性の創意に助けられている。前者は全体として厳かであり、後者は各部分が驚くべきもので好ましい」と述べる。古代叙事詩が「ローマ建築」ならば、『妖精の女王』は「ゴシッ

ク建築」であるから、後者を前者から導き出された規則で判断するのは誤りで、スペンサーはむしろアリオストを始めとするイタリア詩人を模範にしたとヒューズは主張する。²²⁾

論考の後半でヒューズは『妖精の女王』第2巻第12編には「詩人の空想が集めた最も快い観念と描写にあふれている」と称賛しながらも、最後の部分が「タッソーの『アルミーダ』（『解放されたエルサレム』を指す：論者注）における有名な挿話の丸ごとの翻訳である」と指摘する。²³⁾ 後述するように、これは自然と人間が一体となって交響楽を奏する美しい描写だが、この一節はポープがパーレスク「横町」で卑俗な題材を描く際に徹底的にもじることになる。

2. ポープの「横町」

スペンスによれば、12歳になる以前のポープのお気に入りには「ウォラー、スペンサー、ドライデン」であった。²⁴⁾ ポープが所有していたスペンサーの詩集は1611年のフォリオ版で、もともとドライデンの蔵書であったという。²⁵⁾ またポープは1715年のヒューズ宛書簡で、『スペンサー作品集』に収められた「面白く思慮に富んだエッセイ」を称賛し、「スペンサーは私にとってずっと好きな詩人で、彼は欠点こそ見えるが、心から愛さずにはいられない愛人のようなものです」と述べている。²⁶⁾

ただしポープが1706年に書いたという「牧歌に関する論考」には、スペンサーの『羊飼いの暦』に対する批判が含まれている。スペンサーの牧歌は長すぎ、寓意的すぎ、宗教問題を取り入れすぎている。表現は冗長で、用いられた方言は廃語になったものか、卑しい階級しか使わないものだ。もっともこの発言には裏の事情がある。ポープの4編からなる「牧歌集」はトンソンの『詩選集第6集』の末尾に収められたが、同詩集の巻頭を飾ったのはアンブローズ・フィリップスの6編からなる「牧歌集」であった。スペンサーの流儀に倣って書かれたフィリップスの牧歌は、アディソンやティッケルから称賛されたが、ポープの牧歌は無視されるという憂き目にあったの

である。²⁷⁾

ポープが正式なスペンサー連を用いて書いたパーレスク「横町」は、『雑詠集最終巻』（1727）に匿名のまま収められた後に『ポープ作品集』（1736）の第3巻に「英詩人の模倣」の1篇として再録された。後者はチョーサー、スペンサー、ウォラー、カウリー、ロチェスター、ドーセット、スウィフトの文体や作風を模倣した小品ばかりである。その広告でポープは「英詩人の模倣は、早い時期、14歳か15歳の頃に書かれた」と記している。²⁸⁾ ポープは1688年の生まれであるから、この証言を信用するならば、「横町」は1702年か3年に書かれたことになる。

「横町」はイーストエンドの貧民窟を描いた、わずか6連の小品で、不潔で淫猥な描写に満ちあふれている。ここには騎士も姫君も登場せず、美しい森や谷間も存在せず、むしろスウィフトの作風に接近している。スペンスは「ポープとスウィフトの『雑詠集最終巻』に収められた模倣のうち、スウィフトの「町の驟雨の情景」はウェルギリウスの『農耕詩』の文体を模倣することを意図したものであった。ポープ氏によって書かれたスペンサーの模倣作「横町」にはゲイ氏が書いた1・2行が含まれている」という逸話を残している。ゲイが書いた1・2行がどこを指すのか不明であるが、スペンスの逸話集を編纂したオズボーンは最終連が一番それらしいと推測する。²⁹⁾

スウィフトの「街の驟雨の情景」の初出は『タトララー』第238号（1710）で、スティールは「我が非凡な親族ハンフリー・ワグスタッフ氏は（スウィフトを偽名で呼んでいる：論者注）他の詩人がやったこともなく、他の誰もできないくらい見事なやり方であらゆる主題を扱っている」と激賞している。30) スウィフト自身も同年のステラ宛書簡で、このスティールの文章に触れて、「町の驟雨の情景」が「私が今までに書いたうちで最上のものだと彼らは言っているし、自分でもそう思う」と記し、また詩人のロウとプライアが二人とも「私の驟雨をこの種の書かれた詩のなかで飛びぬけていると褒めてくれた」と報告している。³¹⁾

「町の驟雨の情景」はウェルギリウスが『農耕詩』

で用いた堂々たる文体で些末な主題を描くパーレスクで、驟雨に見舞われたロンドン市民の慌てふためく姿を滑稽に描いたものである。³²⁾ コーヒーハウスは暇を持って余した男たちで満員になり、裾の長いドレスを着た女性たちは店に飛び込み、品物を値切るふりをして結局は何も買わない。普段は仲の悪いトローリーとホイッグが同じ軒下で雨をしのぐ。豪雨が屋根に叩きつける中、椅子駕籠の中で震える伊達男は、ラオコーンに外から槍で叩かれて、トロイの木馬の中で怯えるギリシア兵に喩えられる。だがフリート溝を描いた最終連を引こう。

Now from all Parts the swelling Kennels flow;
And bear their Trophies with them as they go:
Filth of all Hues and Odours seem to tell
What Street they sail'd from, by their Sight and Smell.
They, as each Torrent drives, with rapid Force
From Smithfield or St. Pulchre's shape their Course,
And in huge Confluent join'd at Snow-Hill Ridge,
Fall from the Conduit prone to Holborn-Bridge.
Sweepings from Butchers Stalls, Dung, Guts, and Blood
Drown'd Puppies, stinking Sprats, all drench'd in Mud,
Dead Cats and Turnip-Tops come tumbling down the
Flood. (ll. 53-63)

今やあらゆる地域から水嵩を増した汚水溝があふれ、流れる道すがら分捕った戦利品をともに運び去る。色とりどりで様々な臭いを発する汚物は、外見や臭気で、どの街筋から出帆したのか一目瞭然だ。汚物は各々の支流に運ばれ、勢いよく速度を増し、スミスフィールドか聖セパルカー教会で進路を定め、スノーヒルの分水線で合流して大きな流れとなり、傾斜の険しい暗渠からホーバーン橋へと落下する。肉屋の屋台から押し流されたもの、糞便、内臓、血、溺死した仔犬、腐臭のするニシン、みな泥水に浸かり、猫の死骸、蕪の端切れがのたうち奔流に押し流される。

最後の三行は三重韻（トリプレット）で、また最終行は6歩格つまりアレクサンドランでスペンサー連の最終行と同じである。もっとも後にスウィフト

は、ドライデンがトリプレットとアレクサンドランを多用したことを非難し、「24年前に実に馬鹿馬鹿しい主題（「町の驟雨の情景」を指す：論者注）について書いたが、トリプレットとアレクサンドランを追放した」と述べている。³³⁾

ポープの「横町」が書かれたのはスウィフトの「町の驟雨の情景」より前のことだとしても、大詩人の用いた文体を利用して卑近な対象を描くというパーレスクの手法は共通している。さらにスウィフトの詩の最終連は、そのままポープの「横町」に引き継がれているような錯覚さえ覚えさせる。ことに最後の三行は、動物の死骸、野菜屑、汚物や糞尿などにあふれており、嫌悪すら催させる描写になっている。

ポープの「横町」は、よそ者である語り手がイーストエンドとおぼしき貧民街を歩き回って、見聞したものを絵画的な描写で綴っていくという体裁を取っている。これはロンドンを歩き回る語り手が、上京したての徒弟やお針子に大都会の楽しさや恐ろしさを説いていく、ジョン・ゲイの『トリヴィア、すなわちロンドン街路歩行術』（1716）を思わせる。³⁴⁾ 第1連の前半は一見すると普通の風景描写に見えるが、5行目以降は貧しい庶民たちの喧騒に巻き込まれることになる。

In ev'ry Town, where Thamis rolls his Tyde,
A narrow Pass there is, with Houses low;
Where ever and anon, the Stream is ey'd,
And many a Boat soft sliding to and fro.
There oft' are heard the Notes of Infant Woe,
The short thick Sob, loud Scream, and shriller Squall:
How can ye, Mothers, vex your Children so?
Some play, some eat, some cack against the Wall,
And as they crouchen low, for Bread and Butter call. (ll. 1-9)

テムズ川が潮を押し流す、あらゆる町に、
儉しい家とともに、狭い小道がある。
そこでは時折、川の流れが見られ、
多くの小舟が静かに滑るように行き交う。
幼児の苦しむ調べがしばしば聞かれる、

短くこもった啜り泣き、うるさい叫び、甲高い喚声。
母親たちよ、子供をかかも苛立たせるのか。
遊ぶ者、食べる者、壁に向かって便をする者、
皆うずくまって、パンとバターを求めているのだ。

特に6行目は原詩を見れば明らかのように、s音やsh音を頭韻として執拗に並べている。アルパースが「横町」はホガースの「ジン横町」を思わせ、「耳障りな音と口汚い言葉」に満ちていると評するのも当然であろう。³⁵⁾ ポープは「牧歌集」でも頭韻を多用しており、その場合は耳に心地よい響きを作り出すためであったが、「横町」では逆に貧民窟の騒々しさを表わすために、故意に軋むような音を重ねている。

第2連はいよいよ横町の詳細な描写に入っている。視覚と嗅覚と聴覚を同時に刺激するようなイメージが次々と現われる。語り手はあまり感情を吐露することなく不潔で淫猥な情景を書き連ねていくが、最後に本音を暴露してしまう。

And on the broken Pavement here and there,
Doth many a stinking Sprat and Herring lie;
A Brandy and Tobacco shop is near,
And Hens, and Dogs, and Hogs are feeding by;
And here a Sailor's Jacket hangs to dry:
At ev'ry Door are Sun-burnt Matrons seen,
Mending old Nets to catch the scaly Fry;
Now singing shrill, and scolding eft between,
Scolds answer foul-mouth'd Scolds; bad Neighbourhood
I ween. (ll. 10-18)

あちらこちらで剥がれた舗道の上には、
臭いスプラットやニシンがたくさん落ちている。
ブランデーとタバコを売る店が近くにあり、
雌鶏や犬や豚がそばで餌を食っている。
水夫のジャケットが乾かすために干されている。
あらゆる戸口に日焼けした老女が見え、
鱗のある小魚を獲る古い網を繕っている。
甲高く歌うかと思えば、その間に罵り声を上げ、
罵声に悪口の罵声が答え、ひどいご近所連中だ。

第3連は野良犬や子供、売春婦や豚、近隣の者たちが次々と輪唱するかのようになり、種々の耳障りな雑音を奏でていく情景である。

The snappish Cur, (the Passengers annoy)
Close at my Heel with yelping Treble flies;
The whimp'ring Girl, and hoarser-screaming Boy,
Join to the yelping Treble shrilling Cries;
The scolding Quean to louder Notes doth rise,
And her full Pipes those shrilling Cries confound:
To her full Pipes the grunting Hog replies;
The grunting Hogs alarm the Neighbours round,
And Curs, Girls, Boys, and Scolds, in the deep Base are
drown'd. (ll. 19-27)

すぐに嘯みつく駄犬が（通行人を悩ませる）
高い声で吠えながら私の踵に走って近づく。
べそをかく小娘と、しゃがれ声で喚く小僧が、
高い吠え声に甲高い泣き声を加える。
罵る売春婦がうるさい調べに立ち上がり、
金切り声を甲高い鳴き声とごっちゃにする。
金切り声には豚の鳴き声が応える。
豚の鳴き声がまわりの隣人たちに警告する、
駄犬と小娘と小僧と罵声が太い低音にかき消される。
(ll. 19-27)

これはヒューズも指摘していたように、『妖精の女王』第2巻第12編における「至福の園」で自然と人間の織りなす美しいハーモニーの描写をパースクにしたものである。スペンサーの原詩を引く。

The ioyous birdes shrouded in chearefall shade,
Their notes vnto die voice attempred sweet;
Th'Angelicall soft trembling voyces made
To th'instruments diuine responce meet:
The siluer sounding instruments did meet
With the base murmure of the waters fall:
The waters fall with difference discreet,
Now soft, now loud, vnto the wind did call:

The gentie warbling wind low answered to all.

(II. xii. 71)

快い木蔭に身を潜めた陽気な小鳥たちは、
人の歌声に美しく調べを合わせ、
天使の声を思わせる柔らかく震える人声は
神々しい楽器にふさわしく応え、
銀の鈴のように響く楽器は、
滝の音の低いささやきとよく合い、
滝の音はある時は柔らかくある時は高く、
さまざまな音色を立てて風に呼びかけ、
微風のそよぎがすべてに低く応えていた。

ついでながらスペンサーが模倣したタッソーの
『解放されたエルサレム』第16巻第12連もフェア
ファックスの英訳で引いておこう。³⁶⁾

The joyous Birds, hid under green-wood Shade,
Sung merry Notes on ev'ry Branch and Bough;
The Wind, that in the Leaves and Waters play'd,
With Murmurs sweet now sung, and whistled now:
Ceased the Birds, the Wind loud Answer made,
And while they sung, it rumbled soft and low;
Thus, were it Hap or Cunning, Chance or Art,
The Wind in this strange Music bore it's Part.

(16: 12)

陽気な鳥たちは、緑の森の木蔭の下に隠れ、
あらゆる枝や大枝で陽気な調べを歌った。
風は木の葉や水辺で戯れて、
せせらぎとともに甘美に歌い、風いだ。
鳥たちも止めて、風は大声で答える、
鳥たちが歌えば、風は優しく低くささやく。
偶発か策略か、はたまた偶然か技巧か、
風はこの風変わりな音楽の一端を担った。

ジョウゼフ・ウォートンは『ポープの才能と作品
に関するエッセイ』(1782)で、この第3連を引用
して次のような苦言を呈している。スペンサーに慣
れ親しんでない者が「横町」を読めば、スペンサー

は「汚いイメージに満ちており、人生の下層の情景
を描くことに長けている」と想像するに違いない。
しかしスペンサーの「優しく情感豊かな感情、実に
音楽的に流れる韻律、感情におけるある種の快い憂
鬱」を伴わない模倣は、彼の真の姿をもたらしも
のではない。この第3連は「嫌悪すべき不快な音
の集合体」で、『妖精の女王』の精妙な連のパーレ
スクというよりも、真逆なものを作り上げている。
37) 確かにタッソーやスペンサーの描くメロディア
スな情景とは正反対に、ポープの描写には人間と動
物の不協和音が入れ乱れている。

第4連ではスペンサーばりの寓意が登場する。

Hard by a Sty, beneath a Roof of Thatch,
Dwelt Obloquy, who in her early Days
Baskets of Fish at Billingsgate did watch,
Cod, Whiting, Oyster, Mackrel, Sprat, or Plaice:
There learn'd she Speech from Tongues that never
cease.
Slander beside her, like a Magpie, chatters,
With Envy, (spitting Cat) dread Foe to Peace;
Like a curs'd Cur, Malice before her clatters,
And vexing ev'ry Wight, tears Cloaths and all to Tatters.

(II. 28-36)

豚小屋のすぐそば、藁葺屋根の下に、
「悪評」が住んでいた、彼女は若い頃に
ビリングスゲイトで魚の籠を見張っていた、
タラ、ニベ、カキ、サバ、スプラット、ヒラメ。
彼女は終わることのない舌から言葉を学んだ。
「中傷」が彼女の脇でカササギのように喋り、
平安の恐ろしい敵「嫉妬」(唸る猫)も一緒だ。
忌々しい駄犬のように「悪意」が彼女の前で喋り、
あらゆる者を悩ませ、衣もろともずたずたに引き裂く。

ビリングスゲイトはロンドンにある魚市場で、そ
こで働く者たちは上品とは言い難い言葉を威勢よ
く喋るのであろう。ベザントは『18世紀のロンド
ン』(1902)で、ビリングスゲイトの魚売り女たち
が「太って脂ぎって」いて、その会話は「卑猥で、

汚らわしく、冒瀆的」と記しており、別の個所では上京した訪問者が「安全に距離を取って、ピリングスゲイトの魚売り女たちの口論を聞いている」とある。³⁸⁾ またワインレブとヒバートの『ロンドン百科事典』(1983)のピリングスゲイト・マーケットの項にも「そこで使われている汚らわしく口汚い言葉は悪名高かった」とある。³⁹⁾

ジョウゼフ・ウォートンは『エッセイ』で第4連について、「悪評」「中傷」「嫉妬」「悪意」が際立った属性で特徴づけられていないために、スペンサーの寓意とは似ても似つかないと批判する。なぜならスペンサーの筆は「寓意画家ルーベンスのように」力強く、しかもより優美で「熱き彩色家」だからだ。ウォートンはスペンサーの優れた寓意の例証として、先にヒューズも激賞した第2巻第7編第22連とそれに先立つ第21連の一部を引用している。⁴⁰⁾ 第21連後半を示す。

By that way's side there sat infernal Pain,
And fast beside him sat tumultuous Strife;
The one in hand an iron whip did strain,
The other brandished a bloody knife;
And both did gnash their teeth, and both did threaten life.

(II. vii. 21)

その道の脇には地獄の「苦痛」が座り、
すぐそばに騒々しい「闘争」が座っていた。
一人は手に鉄製の笞を握りしめており、
もう一人は血まみれのナイフを振りかざし、
両者とも歯ぎしりをし、命をもらおうとすごんでいた。

ウォートンのこのような主張は、彼が編纂した『ポープ作品集』(1797)でも踏襲されている。⁴¹⁾ しかしロスコウはウォートンの記述を引用した上で、ポープはスペンサーの美と長所に十分知悉しており、彼が試みたのは「スペンサーの言葉と流儀を、平俗でパーレスク的な主題に、いかにきっちりと適用するか」ということであって、彼なりに「原典に劣らぬほど印象的かつ独創的な手法で」やってのけ

たと反駁する。⁴²⁾ またコートアップも、ポープの意図は寓意的な人物を描くことではなく、「ホガースの手法で4人の魚売り女を描き、寓意的な名の滑稽な荘厳さを彼女たちに与えなかったのだ」とウォートンに反論する。⁴³⁾ ただしポープの描く「中傷」「嫉妬」「悪意」があまり冴えないのは確かであり、いずれも交換可能であることを考えれば、ウォートンの主張にもうなずける点が少ない。

第5連の「彼女」は明確に示されていないが、「悪評」を描いているものと思われる。

Her Dugs were mark'd by ev'ry Collier's Hand,
Her Mouth was black as Bull-Dogs at the Stall:
She scratched, bit, and spar'd nor Lace nor Band,
And Bitch and Rogue her Answer was at all;
Nay, e'en the Parts of Shame by Name would call:
Whene'er she passed by a Lane or Nook,
Would greet the Man who turn'd him to the Wall,
And by his Hand obscene the Porter took,
Nor ever did askance like modest Virgin look.
(II. 37-45)

彼女の乳房には石炭船水夫の手で印がつけられ、
彼女の口は馬屋のブルドッグのように黒い。
彼女は引っ掻き、噛みつき、レースも帯も容赦せず、
「売女」と「悪党」が彼女の答えのすべてであった、
恥ずかしい部位もありのままに口にするのだ。
彼女が小路や隅を通り過ぎるときに、
壁の方を向いている男が目に入るのだが、
沖給仕が自分の手で猥褻な行為をしても、
内気な処女のように目をそらすこともなかった。

ウィリアムスは「悪評」について「抽象的な名前にもかかわらず、テムズ川周辺の現実に深く根差した」「寓意的な魚売り女」だと評する。⁴⁴⁾ 確かに「悪評」は誰かれ構わず相手を口汚く罵っており、品位の欠片も持ち合わせない貧民窟の住人として考えたほうが妥当であろう。

第6連は「悪評」が幅を利かせる「横町」から離れて、テムズ川流域の別の場所が次々と言及される。

もはや語り手は「横町」を歩き回って見聞きしたものを語るのではなく、俯瞰的にロンドンの下層社会を眺めているかのようである。

Such Place hath Deptford, Navy-building Town,
Woolwich and Wapping, smelling strong of Pitch;
Such Lambeth, Envy of each Band and Gown,
And Twick'nam such, which fairer Scenes enrich
Grots, Statues, Urns, and Jo—n's Dog and Bitch:
Ne Village is without, on either side,
All up the silver Thames, or all a down;
Ne Richmond's self, from whose tall Front are ey'd
Vales, Spires, meandring Streams, and Windsor's
tow'ry Pride.

海軍が作った町デットフォードはこんな場所で、ウリッジとワッピングにはタールの悪臭が漂う。あらゆる帯やガウンに嫉妬するランベスも同じ、グロットや彫像や壺やジョンの犬と雌犬で、美しい情景を豊かにするトウィックナムも同じ。川の両側には例外となる町はひとつもない、すべてが銀色のテムズ川を上り下っている。リッチモンドもそうだ、その高い地先からは谷や尖塔やくねる川やウィンザーの誇る塔が見える。

(ll. 46-54)

デットフォード、ウリッジ、ワッピング、ランベスはいずれもテムズ川南岸に位置する街で、おおよそ下流から上流に向けて並べられている。ちなみに1783年にサミュエル・ジョンソンは「ほとんど誰も想像さえできないような生活様式」を見たければ、「ワッピングを散策する」ようにボズウェルに勧めたが、92年にボズウェルがワッピングを訪れたところ、街の様子は様変わりしており「失望した」という。⁴⁵⁾ さらに語り手の鳥瞰的な視線はテムズ川を遡行して、トウィックナムに至る。周知のようにポープはこの地に邸宅を構え、グロットや装飾品をあしらった庭園を設けた。「ジョンの犬と雌犬」とあるのは、ポープの隣人でスコットランド相を務めたジョン・ジョンストンの庭園の壁に飾られた「二

つの惨めで小さな犬と雌犬の鉛の像」を指す。クローカーによれば、これはポープが「老いた紳士の趣味を鼻であしらう」証左であるという。⁴⁶⁾ また最後の二行でリッチモンドから眺めたウィンザー城の景観が描かれている。ポープは「ウィンザーの森」(1713)でこの地を「君主の座であると同時に詩神の座」(l. 2)と呼び、国王にまつわる神話を歌い上げたが、ここでは「例外となる町は一つもない」のである。「横町」はスペンサーを愛読してきたというポープの戯れにすぎないかもしれないが、夢幻的なスペンサーの詩形を用いて下層社会の実相を描くという斬新な発想は評価すべきであろう。

注

- 1) 18世紀におけるスペンサーの受容は以下を参照。
Paul J. Alpers, *Edmund Spenser* (Harmondsworth: Penguin, 1969), *Spenser Critical Heritage*, ed. R. M. Cummings (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), Greg Kucich, *Keats, Shelley, & Romantic Spenserianism* (Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1991) 11-64., David Hill Radcliff, *Edmund Spenser A Reception History* (Columbia: Camden House, 1996), Richard C. Frushell, *Edmund Spenser in the Early Eighteenth Century* (Pittsburg: Duquesne University Press, 1999), Hazel Wilkinson, *Edmund Spenser and the Eighteenth-Century Book* (Cambridge: Cambridge University Press, 2017)
- 2) William Lyon Phelps, *The Beginnings of the English Romantic Movement* (Boston: Ginn & Company, 1893) 53., Henry A. Beers, *A History of English Romanticism in the Eighteenth Century* (1899; New York: Dover Publications, 1968) 80., Herbert E. Cory, *The Critics of Edmund Spenser* (Berkeley: The University Press, 1911) 133., Harko G. de Maar, *A History of Modern English Romanticism* (London: Oxford University Press, 1924) 94.
- 3) *The Letters of William Shenstone*, ed. Marjorie

- Williams (Oxford: Basil Blackwell, 1939) 55.
- 4) Edmund Spenser, "Letter to Raleigh," *The Faerie Queene*, ed. A. C. Hamilton, 2nd ed. (London: Longman, 2001) 714-8.
- 5) William Davenant, *Gondibert: An Heroick Poem* (London: Tho. Newcomb, 1651) 7-8.
- 6) Thomas Rymer, "The Preface of the Translator," *Reflections on Aristotle's Treatise of Poesie, by R. Rapin* (London: T. N. for H. Herringman, 1674) n. p.
- 7) William Temple, "Of Poetry," *Miscellanea. The second part in four essays* (London: Ri. and Ra. Simpson, 1690) 325.
- 8) John Dryden, "Dedication," *The Satires of Decimus Junius Juvenalis* (London: Jacob Tonson, 1693) viii.
- 9) Richard Blackmore, "Preface," *Prince Arthur. An Heroick Poem* (London: Awnsham & John churchil, 1695) n.p.
- 10) John Dennis, *The Grounds of Criticism in Poetry* (London: Geo. Strahan, 1704) Proposal, 113-4.
- 11) Edward Bysshe, *The Art of English Poetry*, 4th ed. (1702; London: Sam Buckley, 1710) preface (n.p.)
- 12) Charles Gildon, *The Complete Art of Poetry*, 2vols (London: Charles Rivington, 1718) preface (n.p.)
- 13) Joseph Addison, "An Account of the Greatest English Poets," *The Annual Miscellany: for the Year 1694 being The Fourth Part of Miscellany Poems*, 2nd ed. (1694; London: Jacob Tonson, 1708) 293-4.
- 14) Joseph Spence, *Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men*, 2vols (Oxford: Clarendon Press, 1966) 1: 74.
- 15) *The Tatler*, ed. Donald F. Bond, 3vols (Oxford: Clarendon Press, 1987) 3: 288.
- 16) *The Spectator*, ed. Donald F. Bond, 5 vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 1: 265., 2: 221., 3: 60., 3: 573.
- 17) *The Guardian*, ed. John Calhoun Stephens (Kentucky: The University Press of Kentucky, 1982) 497.
- 18) Matthew Prior, *An Ode, Humbly Inscrib'd to the Queen. on the Late Glorious Success of Her Majesty's Arms. Written in Imitation of Spencers Stile* (London: Jacob Tonson, 1706)
- 19) Samuel Croxall, *An original Canto of Spenser: design'd as Part of his Fairy Queen, but never printed. Now made Publick, by Nestor Ironside, Esq;* (London: James Roberts, 1714), *Another Original Canto of Spenser: Design'd as Part of his Fairy Queen, but never Printed. Now made Publick, by Nester Ironside, Esq;* (London: James Robert, 1714)
- 20) Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, ed. A. C. Hamilton, 2nd ed. (London: Longman, 2001) 216. 『妖精の女王』の引用はこの版に拠る。
- 21) "An Essay on Allegorical Poetry. with Remarks on the Writings of Mr. Edmund Spenser," *The Works of Mr. Edmund Spenser*, ed. John Hughes, 6vols (London: Jacob Tonson, 1715) 1: xliii-xlv.
- 22) "Remarks on The Fairy Queen," *Works*, 1: lx-lxi.
- 23) "Remarks on The Fairy Queen," *Works*, 1: lxxxiii-lxxxiv., *Tasso's Jerusalem Delivered: or Godfrey of Bulloign. An Heroic Poem.* trans. Edward Fairfax (London: J. Purser, 1749) 355.
- 24) Spence, *Observations*, 1: 19.
- 25) *The Spenser Encyclopedia*, ed. A. C. Hamilton et al (Toronto: University of Toronto Press, 1990) 555.
- 26) *The Correspondence of Alexander Pope*, ed. George Sherburn, 5vols (Oxford: Clarendon Press, 1956) 1: 316.
- 27) "A Discourse on Pastoral Poetry," *The Works of Mr. Alexander Pope* (London: Bernard Lintot, 1717) 8. 詳細は拙著『葦笛の詩神 英国十八世紀の牧歌を読む』(国文社, 2017) 226-73. を参

- 照。
- 28) Alexander Pope, "The Alley. An Imitation of Spenser," *Miscellanies. The Last Volume* (1727; London: Benjamin Motte, 1733) 161-4. 「横町」の引用はこの版に拠る。また Pope, "Spenser. The Alley," *The Works of Alexander Pope, Esq.* (London: H. Lintot, 1736) 3: v-vi, 186-8.
- 29) Spence, *Observations*, 1: 59.
- 30) *The Tatler*, 3: 225.
- 31) Jonathan Swift, *Journal to Stella*, ed. Harold Williams, 2vols (Oxford: Clarendon Press, 1948) 1: 62, 74.
- 32) "A Description of a City Shower," *The Poems of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, 3 vols (Oxford: Clarendon Press, 1958) 1: 139. 詳細については拙著『田園の詩神 十八世紀英国の農耕詩を読む』(国文社, 2005) 89-93. を参照。
- 33) *The Correspondence of Jonathan Swift*, ed. Harold Williams, 5vols (Oxford: Clarendon Press, 1965) 4: 321.
- 34) John Gay, *Trivia, or The Art of Walking the Streets of London* (London: Bernard Lintot, 1716) この詩の詳細については拙著『田園の詩神 十八世紀英国の農耕詩を読む』(国文社, 2005) 93-111. を参照。
- 35) Paul Alpers, "Spenser's Influence," *The Cambridge Companion to Spenser*, ed. Andrew Hadfield (Cambridge: Cambridge University Press, 2001) 260.
- 36) *Tasso's Jerusalem Delivered: or Godfrey of Bulloign*, trans. Edward Fairfax (1600; London: J. Purser, 1749) 355.
- 37) Joseph Warton, *An Essay on the Genius and Writings*, 2vols (London: J. Dodsley, 1782) 2: 92-3.
- 38) Walter Besant, *London in the Eighteenth Century* (London: Adam & Charles Black, 1902) 353, 448.
- 39) *The London Encyclopædia*, eds. Ben Weinreb & Christopher Hibbert (London: Macmillan, 1983) 67.
- 40) Warton, *Essay*, 2: 95-6.
- 41) *The Works of Alexander Pope, Esq.* ed. Joseph Warton, 9vols (London: B. Law et al, 1797) 2: 277-8.
- 42) *The Works of Alexander Pope, ESQ.* ed. William Roscoe, 10vols (London: C. & J. Rivington et al, 1824) 2: 362-5.
- 43) *The Works of Alexander Pope*, eds. Whitwell Elwin & William John Courthope, 10vols (London: John Murray, 1882) 4: 427.
- 44) Kathleen Williams, "The Moralized Song: Some Renaissance Theme in Pope," *ELH* 41 (1974) 580.
- 45) *Boswell's Life of Johnson*, ed. George Birkbeck Hill, 6vols (Oxford: Clarendon Press, 1887) 4: 201.
- 46) *The Works of Alexander Pope*, eds. Elwin & Courthope, 4: 428.